Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-08-14

多民族国家マレーシアの国民統合 : インド人の周辺化問題

山田, 満

(Degree)
博士（政治学）
(Date of Degree)
2000-03-21
(Date of Publication)
2014-12-02
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙2396
(JaLCDOI)
https://doi.org/10.11501/3173152
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2002396

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

[16]

氏名・（本籍）	山田　満（やまだ　みつる）　（神奈川県）
博士の専攻分野の名称	博　士（政治学）
学位記番号	博ろ第4号
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与の日付	平成12年3月21日
学位論文題目	**多民族国家マレーシアの国民統合** **—インド人の周辺化問題—**
審査委員	主査　教授　初瀬龍平 教授　吉川　元　　教授　月村太郎

論文内容の要旨

本論文は，多民族国家マレーシアにおけるインド人の政治，経済，社会的位置と役割を歴史的，包括的に検証したものである。マレーシアの国民は，ブミプトラ（土地の子）のマレー人に加えて，植民地時代の労働住民である中国人（華人）とインド人から構成されている。そのなかで，インド人は人口比で7.7%（1991年）であり，その勢力は決して強くない。彼らは，マレーシアの国民統合に参加しつつも，ブミプトラ政策以降，急速に周辺化が進んでいる。

本論文の構成は，序章で問題提起をおこなった後，本文の第1章から第5章で緻密な分析と議論を展開し，終章で結論を述べる形となっている。その間に第6章で事例研究が試みられている。

序章では，第1節で，マレーシアの国民統合をインド人の問題から考えるという視角が提示され，英領マラヤからの独立への過程，および独立後のマレーシアでインド人が国民統合に果たした役割を問う意義が説明される。第2節では，周辺化（marginalization），インド人，民族，エスニシティ，サブ・エスニシティなど，分析枠組みの提示と用語の定義がなされる。「インド人」は，北インド出身のアーリア系と南インド出身のドラヴィダ系に分けられるが，インド人移民（1844年－1941年）の99%が南インド出身であり，そのうち85%がタミル人である。「民族」と「エスニシティ」は，その要求が政治的か社会経済的か，また自らのホームランドを持つか否かに注目して，区分される。第3節は，本論文の構成と概要について述べている。

第1章は「インド人社会の形成と発展」では，第1節で，1840年代以来のインド人移民について，移動時期，移動形態，社会階層，出身地，移住地，職種，男女比，定着状況などの側面から分析される。北インド出身者は，商業，専門職，事務職，下級官僚，軍，警察などに従事したが，南インド出身の移民は主にゴム・プランテーションの労働者であった。第2節では，祖国インドの反英ナショナリズムに呼応するマラヤ・インド人のナショナリズムの現代史が繙かれる。北インド・アーリア系ナショナリズムと南インド・ドラヴィダ系ナショナリズムは，日本占領期にチャンドラ・ボース，インド国民軍支持に集結した。

第2章「インド社会の統合過程」では，第1節で，1950年以降マラヤ・インド人が現地定住を選択

するに至った経緯が明らかにされる。第2節では，マラヤ・インド人会議（のちにマレーシア・インド人会議，略してMIC）の設立（1946年）と，リーダーシップの移動（初期の北インド系から1954年以降に南インド系へ）が説明される。第3節では，MICが1953年以降連合党に参加し，ラーマンの協調路線に従う経緯と結果が提示される。

第3章「連合党体制下のインド人社会の政治構造」では，多数の死傷者を出した1969年の民族対立・流血事件（5・13事件）までの国民統合の時期が扱われている。第1節で，UMNO（統一マレー人国民組織）—MCA（マラヤ［マレーシア］華人協会）—MICの連合政権下でのMICの従属的だが一定の位置と，MIC内リーダーシップのタミル系への転換，北インド系の乖離傾向が明らかにされる。この間の1955年に，MICの総裁としてはじめてタミル人サンバンタンが選出された。彼はエステート労働者の利益を代表していた。第2節では，マルティ・エスニックな民主行動党（DAP），人民進歩党（PPP）などへの都市部インド人の結集が紹介される。第3節では，マレーシア労働運動におけるインド人の積極的リーダーシップ，そのもとでの全国プランテーション労働組合（NUPW）の結成，およびインド人自身の所有する生産者協同組合（NLFCS＝全国土地金融協同組合）の結成の意義が解説される。第4節では，1959年，64年，69年の総選挙の分析を通じて，インド人がエスニック集団としての勢力減少以上に政治的影響力を失った，と論じられる。

第4章の「国民戦線体制下のインド人社会の政治構造」では，1969年の5・13事件以降，政府がブミプトラ政策を進めるなかで，インド人社会がどのように対応してきたかが主題となっている。第1節では，5・13事件を契機とするマレーシア政治の再編と，MICの比重の低下，第2節では，ブミプトラ政策下でのインド人の経済的政治的圧迫が明かにされる。エステート労働者のうち，6万人が本国に帰国せねばならなかった。MICは，政治的に弱体化し，エステート労働者党からの脱皮をはかろうとした。第3節は，1980年代の経済成長のもとでのインド人の対応に焦点を当てる。MIC総裁サミー・ウェルーはインド人救済のために教育基金，経済開発基金を設立するなどした。しかし，MICはUMNOに押え込まれたままであり，他方で野党のインド人議員も華人優勢下の野党に入ることになる。マルティ・エスニックな野党は衰退し，都市部インド人は政治的閉塞状況に追い込まれた。以上のことが，1982，86，90，95年の総選挙の分析を通じても，解明される。

第5章「インド人社会の社会経済構造」は，インド人社会の周辺化プロセスを実証する。第1節で取り上げているのは，マレーシアの言語・教育政策であるが，マレー語の国語化との関連で，英語，中国語，タミル語を初・中等教育でどう取り扱うかは，国内の大問題であり，これまでに種々の試みがなされている。都市部インド人にとって大切なのは，英語とマレー語であり，英語学校の存続が関心事項である。大半は初等教育のみで終わる農村部のインド人にとっては，エステート内のタミル語学校が重要である。第2節では，NEP（新経済政策）のもとで，とくに若いインド人が教育と就職（専門職）の機会を奪われていることが明らかにされる。NEPはカンポンの農民（マレー人）を助けても，エステートのインド人労働者を救わなかった。エステートから都市への人口移動が起り，多くの者がスラム・スクオッター化し，青年犯罪率，暴力団組織，自殺者でインド人の比率は高くなっている。第3節では，国家政策「ヴィジョン2020」のもとで，最下層インド人のためにアファーマティブ・アクションが必要となっている状況が提示される。1996年のMIC年次総会は，社会経済的改善のための包括的プログラムを採択している。

第6章は「事例研究」は，内発的発展の視点に立って，インド人の自立の試みを紹介している。第1節では，1960年に設立された生産者協同組合NLFCS（96年の組合員数7万人）の組織と運営が，解説される。これは，50年代以降ヨーロッパ人所有エステートの売却による小規模自作農化（大半が

華人所有へ）と，それにともなう労働者過剰とマレー人の採用によって，インド人労働者の労働条件が悪化し，失業者が多出した状況への内発的発展の対応である。第2節では，NLFCSがインド人の生活に与えた変化と，NLFCS自体の状況対応（加工業への転化など）が紹介される。第3節では，97年7月に著者がクアランプールとマラッカ州で行ったヒヤリングとアンケート調査をもとに，言語，学歴，カースト意識，エスニシティ，国民意識などについて，都市中間層とエステート労働者の差異が浮き彫りにされる。都市部では，マレーシア・インド人からインド系マレーシア人への意識変化がみられ，エスニシティを越えたビジネス・ネットワークが重視されてきている。

終章は，以上の議論を整理する。第一点は，インド人の意識が対英ディアスポラ（離散）・ナショナリズムからマラヤ人ナショナリズムへと移行し，独立後には，他のエスニック集団との関係でのインド人エスニック集団意識へと展開し，あわせてインド人内部でのサブ・エスニシティ意識が明確になってきていることである。第二点は，インド人，とくにエステート労働者の周辺化（政治，経済，社会）がブミプトラ政策のもとで急速に進んでいることである。第三点は，将来の見通しとして，インド人の中産階層はマレーシア国民と多文化主義の途を求めており，インド経済の発展とともに，在外インド人とのネットワークが活性化されるであろうことである。第四点は，マレーシア国民統合が堅持されてきたことの確認であり，そのうえで，経済的資源配分，政治的発言力，教育機会などで取り残されたインド人の不満状態の再確認である。最後に本論文は，今後の研究課題を提示して終わる。

論文審査の結果の要旨

マレーシアは，主にマレー人，華人，インド人から構成される多民族国家である。1969年5月13日に多数の死傷者を出した民族間の流血事件が起った（死者華人143名，マレー人25名，インド人13名）。その後，マレーシア政府は，ブミプトラ（土地の子）であるマレー人優遇政策を採用した。このように問題はあるものの，マレーシアが国民統合を堅持してきたことは事実である。では，そのなかでのマイノリティ集団は，どのようにして，自己のアイデンティティを堅持し，日常生活を守り，国民国家の形成に参加してきたのか。その実体は，意外に知られていない。

とりわけ，マレーシアのインド人に関していえば，日本での学問的研究は皆無に近い。一般的にいっても，日本の学界で華僑，華人に関しての研究は多いが，在外インド人に関する研究は多くない。本論文は，マレーシアのインド人の歴史と実体に本格的に切り込んだ日本での先駆的業績である。その価値は，初めてという意味だけではない。多民族国家のエスニック集団について，周辺化，民族，エスニシティ，サブ・エスニシティという概念を駆使して，斬新な視点を提示しているところにこそ，本論文の真の価値がある。特記すべきことは，サブ・エスニシティという新しい概念を導入し，有効に活用していることである。つぎに本論文の学問的貢献をまとめておこう。

第一点は，サブ・エスニシティの概念の適用によって，マレーシアのインド人について，インド人として一括できないことを明確にしたことである。彼らは，北インド出身アーリア系と南インド出身ドラヴィダ系に区分され，さらに南インド系はタミル人，テルグ人，マラヤーリー人などに区分される。この相違は，社会的，経済的，ひいては政治的状況，態度の相違となって現われる。たとえば，北インド系は，都市で商業，事務職などに従事し，高学歴で，政治的に覚醒している。これに対して，南インド系のタミル人は，主にエステート労働者であり，低学歴であって，政治的関心がうすく，保守的である。政治的にMIC内部の対立，あるいはMICか野党かの選択も，サブ・エスニックな意味をもっている。経済的に周辺化で深刻な状況にさらされているのは，エステート労働者であり，タミ

ル人の方である。将来展望に関して，都市のインド人は，英語教育と高等教育に強い関心を抱くのに対して，農村のインド人は，初等教育にとどまり，タミル語教育で満足する。本国や海外のインド人との経済的関係を求めるのは，都市インド人の方である。

第二点は，多民族国家マレーシアにおけるインド人の政治，経済，社会的位置とその変化を周辺化現象として，検証していることである。脱植民地と独立が，タミル人エステート労働者に負担をかけることになり，それがブミプトラでいっそう加速され，ついには一部の者は都市への移住，スラム・スクウォッター化にいたり，新しい社会問題に発展しているとの指摘は，注目すべきである。他方で，都市部のインド人は，ブミプトラ政策以降の周辺化のなかで，マルティ・エスニックで，海外のインド人との経済的関係を開こうとしているとの指摘も，注目される。

第三点は，マレーシアのインド人について，移民から国民に転化していく過程を解明していることである。独立までの時期は，本国の反英ナショナリズムとの関係でインド人（民族），マラヤの独立に向けてマラヤ人（国民）と捉えられ，独立後は，その他のエスニック集団に対してはエスニシティ，インド人の間はサブ・エスニシティで捉えられている。このように，多民族社会・国家における特定のエスニック集団（インド人）の社会的，政治的機能は歴史的に変わっている。この結論は，民族，エスニシティを歴史的に不変の実在とみることへの警告となっいる。

第四点は，内発的発展の視点に立って，インド人の自立との関係で，労働組合，生産者協同組合の結成とその活動を明らかにしていることは，インド人集団の問題の解明として重要であるだけでなく，一般に協同組合運動が強力であるマレーシア社会の特性を明示したものとしても，重要な研究成果と評価できる。

第五点は，総選挙の時系列的分析，インタービューやアンケート調査の活用など，資料収集，分析方法で，思い切った斬新な方法を採用しているが，それがうまく研究の中で全体的に活かされていることである。また，全体としてのマクロの議論をミクロの事例研究(生活協同組合，および実態調査)で補強しているのも，堅実な方法であり，高く評価できるものである。

以上のように，本論文の学問上の貢献は大きいが，若干の問題も存在している。第一は，民族，エスニシティ、サブ・エスニシティの概念規定とその用法に関してである。サブ・エスニシティ概念の提起は高く評価するものの，以上の三つの概念規定・用法は，通説のあいまい領域を脱却しきっていない。第二点は，タミル系のサブ・エスニシティの議論が詳細であるのに対して，北インド出身アーリア系や都市インド人の分析に深みが足りないことである。第三に，他のエスニック集団との相互認識，相互関連についても，もう少し議論を展開する必要があるであろうし，インド人全体の国際移動のなかでマレーシア・インド人を積極的に位置づけることも必要であろう。

しかし，第一，第二の問題点は，決して本論文だけに固有のものではない。民族研究，エスニック研究一般で未解決，あるいは未開拓の領域である。第三の問題点は，本論文の最後に今後の研究課題として明記されていることでもある。したがって，以上の問題点は，本論文の学問的価値をいささかも損なうものではない，と判断される。

以上の理由により，審査委員は，本論文の著者である山田満氏が博士（政治学）の学位を授与されるのに十分の資格を有するものと認定する。